

HuRP通信



ハープつうしん 第80号
2013年4月号

HuRP 2013年の活動予定

会員のみなさま、HuRP 通信 3月号（特別号）はいかがでしたか。HuRP では、通信の企画はスタッフ全員で話し合って決めるのですが、3月号を編集するなかで、いくつもの「やりたいこと」——活動の「芽」が顔を出しました。それら全てを発芽させ、育てていくのは難しいですが、少しずつ順番に、私たちのペースで大きく形にできたらと考えています。

さて、本号では、だいぶ具体的になってきた今年の HuRP の活動予定について、会員のみなさまにお伝えします。ご意見等、ぜひ、HuRP までお寄せください！（hurp@hurp.info）

◆HuRP:2013 年の活動予定

被災当事者でない周辺の私たちは、「3.11から 2 年」、とあの日を過去の話にしてしまいかですが、当事者にとっては、震災の日から今の今まで、一日一日が重みのある、忘れ難い時間なのではないでしょうか。震災前は普段通り日々を暮らす、私たちと同じ一人ひとりであったわけで、そのような一般的の、市井の方々に、震災を経験し今もっとも必要としていること、一番大切だと感じていることなど、震災後の生活の現実を HuRP の一人ひとりに語っていただけないだろうか、と考えました。

地震、津波、原発被害、それらによって浮きぼりになった問題——「3.11」を、一步引いたところから、通底するものは何かを見極め発信することも重要です。しかし同時に、私たちは、具体的な地域、人に注目し、顔を見ながら、当事者の人たちと交流をしながら、「3.11」後の社会を考えてい

きたいと思います。

そこで、HuRP のスタッフのひとりが一度訪れたことのある、仙台市の蒲生（がもう）地区（「3.11」で地震と津波の被害を受けた）を選びました。「仙台津波復興支援センター」の協力を得て、ボランティアに参加しながら、被災者宅など可能な限り訪れて話を聞きに行くことを計画しています。

また、そこで聞いた話を中心には、HuRP のブックレットとして出版したいと考えています。

また、HuRP 会員のアマチュアカメラマン・竹内敏恭さんの写真集の刊行を計画しています。竹内さんは、2002～2010 年末まで石巻の漁港の写真を撮っていましたが、その港の風景は震災で消し去られてしまいました。2012 年から再び石巻の同じ場所を撮影しています。石巻、そしてそこにいる／いた人びとが見えてくる写真集にし、刊行後、石巻・東京での写真展、イベントなどを行いたいと思います。

被災の多様性に対応する支援への期待—ふたつの「被災地」から〈1〉

今野順夫（福島大学名誉教授）

3.11 東日本大震災から 2 年が過ぎた。

震災は、昨日のことのようにも思えるし、だいぶ時間が過ぎたようにも思える。2 年も過ぎても手付かずの街を見、復旧復興の遅さに地団駄を踏み、時間が無駄に過ぎたようにも思える。しかし、心のなかは、震災はまだ昨日のことのように揺れ動く。

▼復興の「格差」のなかで

被災地の中でも、主として地震・津波の被害をこうむった岩手県・宮城県と原発事故被害が重なった福島県では、被害の相違とともに、復興の過程には大きな格差が明確になりつつある。また、同じ県内でも、被災の中心である海岸部と、被災の少ない内陸部の格差も顕著になりつつあり、直接の被災者と被災地にいるが被災の少ない人々の間の溝も否定できない。それは一個人の中でも、複雑な葛藤があるよう思う。

私の 3.11 は、30 年来居住している福島市で迎える。事故を起こした福島第一原発からほぼ 60 キロ。その日から原発事故被災との格闘が始まる。家族の安全確認、そして極度に制限された衣食住。職場での学生の安否確認、自宅・研究室の復旧。原発事故避難地域から大学体育館に避難してきた方々への支援のお手伝い。思いがけない居住地の放射線汚染。原発事故被災地特有の困難な復興の取組みは、今に続く。有志とよびかけた自主的な「ふくしま復興支援フォーラム」は、地元の専門家・行政担当者・研究者等の問

題提起をもとに、市民レベルでの復興に向かう合意形成を目標に 35 回の開催となった(*1)。

居住地の福島とともに、私の親戚のほとんどが住む郷里・宮城県女川町も大きな津波被災をこうむった。連絡が全く取れない。2 日後の NHK テレビのニュースで、避難している姪を見かけたことが安全確認の第一報。人口 1 万人の 1 割近くが犠牲になった。2 日前の大きな揺れの時に電話で話した実姉を含め 5 人の親戚が犠牲になった。まさかのことである。告別式も全て済ませたが、3 人は未だ行方不明。私を育てた郷里を消滅させたくない、何かできないかと、微力ながら町の復興計画の手伝いをし、流された図書館復旧に努力してきた(女川つながる図書館(*2))。

その意味では、私の心の中には、復興の見通しさえつかない原発避難地域を含む福島でのものがきと、津波被害を経て、高台移転工事が進みつつも、町民の流出が激しい女川が、同居している。

▼これまでの「震災」との違い

東日本大震災被災地の復興は、阪神淡路大震災等の復旧復興の経験に学びながら進められているが、その被災の相違にも気付かされる。

それは、被災地の広範囲性である。一極集中的に行えない復旧復興活動、人手や資材の不足、瓦礫処理も自己処理が出来ない等をもたらす。復興遅延の要因ともなる。

また、地震による倒壊だけでなく、大津波が一瞬にして人も家も奪いつくし、また原発事故被害

や風評被害等による地元経済の困難等といった、複合的な被害をもたらしたということである。

さらに、被災地における社会経済的遅れが、被害を一層増大させ、復旧の困難となっていることがある。震災という異常時の困難は、平常時における社会経済的遅れが被害を加重させたことにある。異常時の状態は、平常時の延長と見るべき側面がある。従って、復興には、平常時の遅れからも脱却した地域づくりが求められる。

被災地は、被災が過去のものとして忘れ去られ、消し去られることを恐れる。復旧復興の遅延・長期化が、持続的関心保持に困難をもたらしているものであるが、それは瓦礫処理の遅れ、浸水地域での住宅再建の困難、高台造成等の長期化、また原発被害地域での帰還困難等によるものもある。

震災から 2 年経った被災地に求められるのは、

東北の有する地場産業等の発展を基軸に、住民目線に立った長期的な地域づくりの推進であろう。被災地以外からの継続的な「寄り添った」支援(協働)を期待することになる。そのためには、2 年経って顕わになる多様な各被災地の現状と課題を具体的に分析し、住民の意向を反映させた復興の推進でなければならないと考えている。長期戦を覚悟した、被災地の持続的な努力が特に必要となっている。

(*1) ふくしま復興支援フォーラム

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>

http://blog.livedoor.jp/tkonno_2012/ (ブログ)

(*2) 女川つながる図書館

津波で全壊した女川町図書室。全国からの本の寄贈等でまずは絵本図書館として、そして 2012 年 3 月 23 日に「女川つながる図書館」として開館した。移動図書館の運行も行っている。

<http://current.ndl.go.jp/node/20458>

HuRP の本棚：『活断層上の欠陥原子炉 志賀原発ーはたして福島の事故は特別か』

◇HuRP 会員の著書の紹介◇

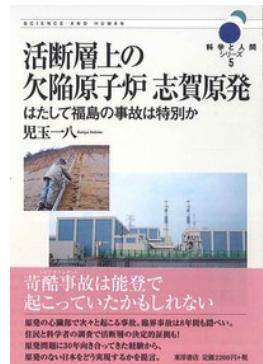
この本をなぜ書いたのか、どのような内容か：

福島第一原発事故は、東北地方太平洋沖地震の地震動と津波を引き金にして発生したシビアアクシデント(苛酷事故)です。政府や電力会社は、この事故が「福島第一原発だから起こった」のであって、津波対策などの「安全対策」をとったとして、「3.11」などなかったかのように原発再稼働の道を突き進んでいます。

私は、この事故は「福島第一原発だから起こった」事故ではなく、福島第一原発で起こったのは「たまたま」であり、日本の原発はどこでも、シビアアクシデントが発生する危険性がある、と考えて

います。このことを多くの人たちに知ってほしいと考え、本を書きました。

この本で事例としてあげた志賀原発は、実際にシビアアクシデントに向かう道を歩んでいました。志賀原発では、沸騰水型軽水炉(BWR)の心臓部である制御棒と再循環ポンプで重大な事故が何度も発生しており、最大の事故は 1999 年に発生した志賀 1 号機の臨界事故です。北陸電力はシビアアクシデントの一歩手前まで至った臨界事故を、8 年にわたって隠ぺいしました。臨界事故、そしてその後も続く制御棒の



誤動作事故は、BWR が本質的欠陥をかかえていることを示しています。

志賀原発は、欠陥原子炉が活断層の上に乗っているという致命的な問題をかかえています。能登半島には数多くの断層が存在しており、能登半島そのものが断層運動によって形成されたと言われています。中でも、志賀原発の北約 9km に推定される富来川南岸断層は、活動すれば原発に重大な影響を与えると考えられています。石川では住民運動と科学者の共同で、2007 年から富来川南岸断層の問題を追いかけてきましたが、2012 年に連続して行った調査により、この断層が確かに存在して活動している決定的証拠をつかみました。

日本の原発の多くは半島部にありますが、能登半島は人口・面積とも群を抜いて大きく、毎年 700~800 万人の観光客が訪れます。志賀原発でシビアアクシデントが発生したら、原発以北の住民や観光客は原発周辺を通過しなければ半島を脱出できず、行き止まりの奥能登に閉じ込められてしまいます。

こうした問題を放置したまま、原発を再稼働させることなど許されません。

福島原発事故を踏まえて、原発ゼロをめざす国民世論が高まっている一方で、原発立地地域では、原発依存から脱却することへの不安の声も上がっています。原発立地地域の住民が、原発がなくてもやっていける地域社会づくりに確信をもつて歩み始めることが、原発のない日本をつくるために不可欠です。志賀原発をおしつけられた能登は、全国で 50 基もの原発が立地している日本の一つの縮図です。本書ではその能登から、原発のない日本への道筋を示したいと考えました。

四半世紀にわたって向き合ってきた志賀原発のさまざまな事例を検証しつつ、原発ゼロをどのように現実のものにしていくか—その道すじを提言しました。

児玉一八 (医学博士、核・エネルギー問題情報センター理事ほか)
『活断層上の欠陥原子炉 志賀原発

——はたして福島の事故は特別か』

A5 版・224 ページ

定価 2310 円(本体価格 2200 円+税)

◀憲法関連イベントのお知らせ▶ 改憲問題をアジア・韓国との関係で問う！

■權赫泰（クォン・ヒョクテ）氏（韓国・聖公会大学教授）講演会「日本の改憲問題と日韓関係」

韓国や東アジアは日本の改憲問題をどう見ているのか、改憲は東アジアの平和と安全保障にどんな影響を及ぼすのか、韓国人々の声に耳を傾けながら考える場になります。（DVD「STOP 戦争への道」完成披露上映）

【日時】2013 年 5 月 27 日（月）18:30~21:00 【会場】全水道会館（水道橋）【参加費】500 円

【共催】法学館憲法研究所・シリーズ「憲法と共に歩む」製作委員会【後援】伊藤塾

※事前予約制（定員 80 名）：参加希望者は、お名前、連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を法学館憲法研究所にメールか FAX でご連絡ください（メール：info@jicj.jp / FAX：03-3780-0130）。

【編集後記】▼5月の大型連休が間近ですが、寒い日が続きます。みなさん新年度をどのように迎えていますか？ 今月はこれから HuRP の活動予定をお伝えしました。会員のみなさんとの意見交換も、活発に行いつきたいと思います。今後の HuRP 主催の企画やイベント情報をお見逃しなく！（望）